

華北農村の「香頭」及び「看香」

—— 武高庄村を中心に ——

王 海 翠

WANG Haicui

非文字資料研究センター 2021年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 武高庄村では、香頭という言葉に二つの意味がある。基本的には廟で焼香活動を主催する人物を指すが、焼香を通して神仏と交信し、神仏から受け取ったメッセージを依頼者に伝える者という意味もある。筆者の調査によれば、香頭には霊力を持っている者と霊力を持っていない者がいる。

霊力を持つ香頭は、線香の燃焼状態が神仏からのメッセージととらえ、その意味を読み取る。香頭は神仏から受け取ったメッセージを依頼者に伝える役割を果たし、このプロセスは看香と呼ばれている。香頭は看香を通じて依頼者の病気や悩み事を解決する。地元の人々はこのような香頭を「看病看事」を行う香頭と呼んでいる。香頭は、看病看事によって問題を抱えた依頼者や信者の問題を解決することが仕事であり、香頭の宗教的実践である。

本稿では、華北農村の武高庄村における香頭の種類、霊能者である香頭の組織や儀式、看香作業などの具体的な事例を通して武高庄村の香頭の民俗宗教活動の実態を明らかにした。

Xiang-tou and Kan-Xiang in Agricultural Villages in Northern China

—— Focusing on Wugaozhuang Village ——

Abstract : In Wugaozhuang Village in northern China, the term *xiang-tou* has two meanings. It generally refers to a person who conducts the incense burning ritual in a temple, but *xiang-tou* can also mean a person who mediates with and communicates God's messages to clients who come for help. The author's study has found that some *xiang-tou* are endowed with psychic powers while others are not.

The remains of burned incense sticks are believed to represent a message from God, and a psychic *xiang-tou* interprets and conveys that message to a client. This process, known as *kan-xiang*, is how a *xiang-tou* helps to cure illness or solve problems of clients. *Xiang-tou* who perform *kan-xiang* are called “*xiang-tou* who perform *kanbing-kanshi* (nursing care and activities to solve problems of unknown causes)” by local people. Solving the problems of clients and followers through *kanbing-kanshi* is the function and religious practice of a *xiang-tou*.

This paper provides a picture of the folk religion activities in the village of Wugaozhuang in northern China by describing in detail the various types of *xiang-tou*, the organizations and rituals of psychic *xiang-tou*, and the steps and tasks involved in *kan-xiang*.

はじめに

現在、中国には仏教、道教、イスラム教、カトリック、プロテスタントの「五大宗教」(五つの主要宗教)が存在している。これらの宗教には国の宗教政策が関わっており、「中華人民共和国公民は、宗教信仰の自由を有する」(「中華人民共和国憲法」第36条)という憲法がある。一般国民には、これらの宗教を信じる自由と信じない自由がある。また、上記の五大宗教以外の宗教を信じる自由もある。しかし、華北地域に存在する看香と呼ばれる「民間信仰」は上記のどの宗教にも分類されていない。国家に認められ、保護されている宗教を信じる人々が、焼香をする人を「迷信」だと見下すこともある。このような状況を踏まえ、周星は「民間信仰」を「民俗宗教」⁽¹⁾と再定義し、憲法で保護されている「五大宗教」と同様に合法性を持たせることを提唱している(周2011:367)。筆者は、「民俗宗教」の概念を用いることで華北地域の民衆の立場から日常生活の宗教実践の正当性をよりよく説明することができると考えている。それによって華北地域の民衆の生活状況をより深く理解することができるようになると思う。

筆者は中国河北省の武高庄村でフィールドワークを行い、武高庄村及びその周辺地域に活躍している宗教職能者、香頭と出会った。当地では、香頭は「行好」⁽²⁾と呼ばれる民俗宗教の指導者と実践者であり、行好と呼ばれる民俗宗教の活動の招集人でもある。そして、香頭は様々な宗教活動において中心的な存在である。そこで本稿では、香頭に研究の中心を置く。武高庄村の孔香頭に関する調査は2021年11月30日～12月26日、2022年1月7日～2月25日の2回にわたり看香に焦点をあて行った。これらの現地調査に基づいて、香頭の種類、香頭の組織及び香頭の看香活動の実態を述べていきたい。

I 調査地の概要

武高庄村は館陶県寿山寺村郷に属する。同村は国道309号線から北に約2.8キロメートルの所にある。人口は844人、総世帯数214、耕地面積1,330畝⁽³⁾、主産業は農業で主要な農産物は小麦、トウモロコシ、ピーナッツである。農民の純収入は月6,200元⁽⁴⁾である。中国共産党支部委員会は、主書記と副書記、組織委員の3人で構成されている。行政の末端村民委員会は、主任、副主任、インフラ整備主任、治安主任、女性主任の合計5人で構成されている。村のインフラは整っており、舗装されている道路は3,000メートル、変圧器は3台、井戸は15本、埋設線は2万メートル、水道も完備している。2011年に邯鄲市新型化工産業園区⁽⁵⁾が広平県と館陶県の境に指定された。武高庄村は新型化工産業園区の東側に位置し、距離が0.5キロメートルほどであるため、武高庄村には新型化工産業園区⁽⁶⁾の汚水処理施設が設置されている。

武高庄村には二つの小さな道教の廟があるが、いずれも政府の登録証明書を持っていないため、政府によって管理されていないことがわかる(写真1と写真2)。一つ目の「三官爺廟」では、主神である天元官、地元官、水元官と温良、馬善という五つの神が祀られており、廟の面積は約24平方メートルである。三官爺廟の三官とは天官、地官、水官のことである。武高庄村では、天官は福を賜わり、地官は罪を赦し、水官は厄を解くといわれている。温良と馬善は共に明代の『封神演義』の登場



写真1 三官爺廟

(いずれも 2022年2月1日筆者撮影)



写真2 土地廟

人物である。温良と馬善は、強盗として活動していたが、殷郊によって捕らえられ、その部下になった。彼らは西岐を攻撃したが、馬善の正体は燃灯道人の住む元覚洞にある瑠璃灯の中の火の精であり、最後は燃灯道人に回収された。温良は哪吒と楊戩によって殺された。温良は『封神演義』の最後で日遊神になったが、馬善は小説の最後で神にはならなかった。また、武高庄村では、温良は地上の善悪を見分けることができる神だと信じられている。武高庄村の民間伝説では、馬善は最終的に燃灯道人に取り戻され、一緒に仏のもとへ修行に行き、馬善は燃灯五光仏になったという。馬善は火の神として崇拝されている。もう一つの「土地廟」では、主神は土地爺であり、配神は判官と小鬼である。武高庄村の人々は、人が亡くなった後、まず土地廟に行き「報廟」を行う。報廟とは、死者の家族が亡くなった人の情報を土地爺に報告することである。この土地廟の面積は約18平方メートルである。この二つの廟では、旧暦の毎月1日と15日に行好を行う熱心な人々が線香を供えに訪れている。この廟は、1980年代頃に行好する人々の寄付で建てられ、今から10年ほど前に一度改修されたという。

本研究のフィールドワークは武高庄村にて実施し、孔香頭（武高庄村に在住）への聞き取りを行った。武高庄村を調査地として選定した理由は次の三点である。一点目は、この村落では、行好という民俗宗教活動がよく行われているためである。これまでの実践宗教に関する先行研究は、ほとんどが宗教施設である廟についてのものであり、個人あるいは香頭の家庭における実践宗教まで言及したものはない。そこで本稿では香頭の家で行われた行事を調査し、個人や家族の行好を掘り下げて見ていく。二点目は、武高庄村は山東省の泰山の近くに位置し、泰山への巡拝の活動が多くなっていることが挙げられる（図1）。フィールドワークで出会った民衆の信仰対象である泰山奶々はよく村人の宗教活動に登場する。調査地では、民衆の信仰する対象は漠然とした神仏であり、諸神・仏の神譜は膨大な数ともいえるが、その一部は、例えば泰山奶々、無生老母などの女神がいる。三点目は、筆者が以前からこの地域を中心に研究しており、すでに地域の人たちとの関係を築いていたからである。

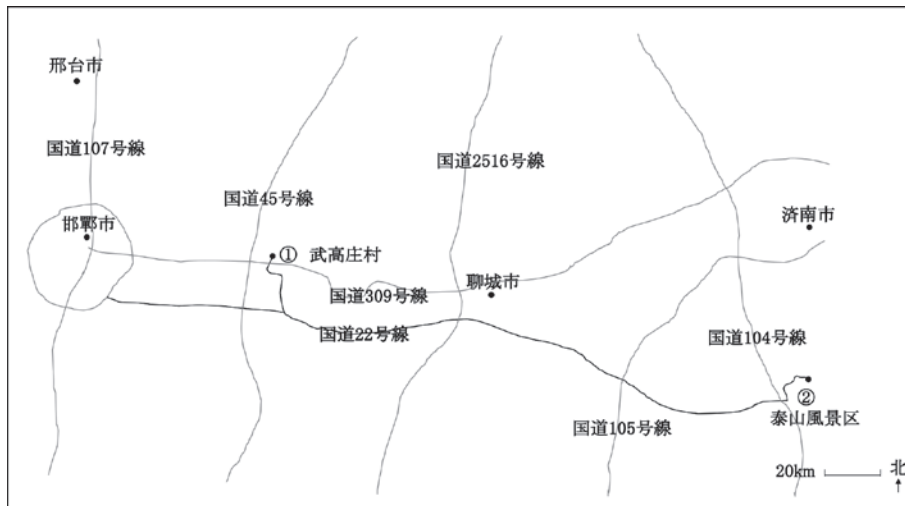


図1 地図で見る武高庄村から泰山までの距離
(2023年7月26日グーグルマップを参考にして筆者作成)

II 先行研究

(1) 香頭をめぐる研究

岳永逸によると「1920年、当時の中国における反迷信の広い文脈の中で、中国民俗学の先駆者とされる顧頡剛らは、人々の民間信仰に対する執念に驚嘆し、事実を直視して北京郊外にある妙峰山廟会の調査を行い、できるだけ包括的に、詳細に、真実を記録し、ありのままの民間社会の真実を伝えようとした」という（岳 2017：163）。

日中戦争のさなかの1940年に、末弘厳太郎の指導の下で華北農村慣行調査が実施された。その準備的調査は1939年10月、東亜研究所第六調査委員会内の學術部委員会（委員長山田三良）によって、華中商事慣行調査計画その他とともに並行して行われたものである。農村慣行に関する調査研究員は主として東京大学の関係者によって構成されていた。1944年をもって慣行調査事業は終了した（中国農村慣行調査刊行会編 1952：1-2）。その結果、1952年に『中国農村慣行調査 第一巻』、1954年に『第二巻』、1955年に『第三巻』と『第四巻』、1957年に『第五巻』、1958年に『第六巻』が刊行された。このうち『第一巻』に、香頭について「村民は会首と香頭と何れを多く用いるか＝在会的人と普通にいい、香頭・辦事的人ともいい、会首とはあまり言わない」と記されている。また、「香頭の香はどういう意味か＝廟の線香をたく時に代表者となっていく」ともある（中国農村慣行調査刊行会編 1952：130）。

次に、『第六巻』の中で、「村落の様々な役職についての記述をみることができる。役職には、会首や「香頭兒」などの称呼があり、例えば、河北省の東王庄の「吃会」を行う際に食器を保管するのは香頭兒という。吃会とは、清明祭の時に同族の墓参に行き、村へ帰ってから行う食事会のことである。吃会は食事が目的でなく、人を集めるのが目的である」と述べている（中国農村慣行調査刊行会編 1958：92）。また、同書の中で、「河北省涿県では船の持ち主が作った「船会」の幹部は香頭」と述べている（中国農村慣行調査刊行会編 1958：126-127）。

以上のように、華北地域の民間組織や宗教の職能者について名称は異なるが、「○○頭・首」はそ

の組織のリーダーを指すことについては同じである。しかし、上記の会首や香頭の記述は断片的であり、会首や香頭の関係も不明である。その一部は宗教活動の招集人であるが、靈感があるかどうか、つまり看香看事できる香頭のことについて、明確に記述していない。

1941年、李慰祖⁽⁷⁾の『四大門』の研究では、北平郊外の民俗宗教「四大門」における香頭について、詳しい説明がある。その中には、香頭の定義や由来、香頭と仙人（神仏）の関係、香頭と弟子の関係、香頭と依頼者の関係、香頭同士の関係、香頭の社会的・家族的地位、香頭の道徳などが記録されている。李慰祖によると「香頭は、仙家（神仏）に仕え、自分たちや人々の現世・来世に幸福をもたらす修行をする」という（李 2011：38）。香頭の分類は次のように記す。

香頭には二つの種類がある。一つは「頂香」といい、神仏に憑依されたもので、香頭の体を使って神仏のメッセージを依頼者に伝える。もう一つは看香といい、仙人は香頭の体内には入らず、ただ「役人」に霊力を与えて、すなわち線香の炎を観察することによって、神仏のメッセージを依頼者に説明する者である（李 2011：67）。

香頭に関する研究は少ないが、その中で岳永逸は李慰祖の『四大門』を参考にし、香頭を大きく二つに分け、「神の啓示を受けた者」と「後天的に習得した者」とに大別している。詳細は以下の通りである。

梨区では、香頭には大きく分けて二つのカテゴリーがある。神の啓示を受けた者には、(1) 何の兆候もなく生まれ、自然に伝授される者。(2) 偶然に伝授される者、心神喪失などの偶発的な出来事によって伝授される者。(3) 家族に「老根」を持つ者がいて、本人は自覚していないが、神仏に見出され、強制的に伝授される者、あるいは「当差」になる者が含まれる。また、後天的に習得する場合には、三つのパターンがある。(1) 荒行してから不思議な能力を持つ。(2) 香頭の指導を受け、ある神仏を祀り、長年の原因不明の病気が治癒されてから不思議な能力を持つ。(3) 弟子入りして習得する（岳 2010：188）。

(2) 看香をめぐる研究

看香については、李慰祖は『四大門』の中で、「線香の意味は神仏に齋を捧げることであり、線香は神仏に捧げる食物である。異なる香頭は、線香が燃える際に生じる炎の形状に対して異なる解釈がある。李慰祖によると、線香の燃焼時の火焰について、特に四つの異なる形状に対する解釈がある。「反香」は、線香が燃える際に炎が非常に強烈で、灯滅せんとして光を増すという意味を示す。これは依頼者の病気が良くなるどころか、むしろ死の兆候であることを意味する。「怒香」は、線香が一向に着火せず、点火してもすぐに消える状態である。これは依頼者が誠実でないことを示し、神仏が香火を受け入れないとされている。「凶香」は、線香が点火されると炎が一気に屋根に向かって上がる現象で、これは不吉な兆候である。「蓮花香」は、線香の上部が燃え、線香の下部も火を灯している状態を指す。これは神仏が依頼者の香火を受け入れ、吉祥な兆候であるとされている」と述べている（李 2011：71）。

また、岳永逸によると「看香と靈験あらたかの関係について述べている。線香自体が神性を持ち、靈験あらたかであるとされている。香頭が線香の燃焼の様子を観察し、因果の解釈をすることは、梨区の廟会でよく見られる儀式の実践である。香頭を求める人々は巡礼の旅を経験し、または通過儀礼である。ここでの巡礼は、依頼者の自己浄化、反省、超越のプロセスではなく、むしろ神仏に線香を捧げて神仏の祝福や福報を得ようとする試みであり、生活の困難、不均衡、リスクを解決し、俗世の生活を既存の均衡や想像されるべき平和な状態に戻すことを望んでいる。靈験あらたかを検証する方法は、香頭の助けを求める人の数、依頼者が香頭の家からどれだけ離れているか、また香頭の家が依頼者から授与された扁額などの数によっている」という（岳 2014：146-155）。

以上、香頭の分類について述べてきた。李慰祖と岳永逸のこれらの分類は本研究にとって参考になる。ただ、香頭は全て靈的な力を持っているとは限らない。岳永逸は香頭の分類をより詳細にしたが、いずれにしても靈力を持たないものが香頭とみなされるかどうかについては明言していない。

また、前述の李慰祖による看香研究では、線香の燃焼の形状や香頭に関する香火の解釈が言及されている。岳永逸もまた、看香の重要な要素である靈験あらたかの問題に触れている。これらはほぼ完全な看香儀式のプロセスを構成しているが、前述の研究では具体的な看香儀式の事例には触れられておらず、看香など宗教的行為は、実践宗教であることも明示していない。以上の先行研究を踏まえて、武高庄村の香頭及び看香の実態を述べていきたい。

Ⅲ 香頭とその種類

武高庄村には、看病看事を行わない A タイプの香頭、もう一つは看病看事を行う B タイプの香頭がいる。以下、A タイプの香頭と B タイプの香頭に分けて説明する。

まず、A タイプの香頭は、香頭になる前は普通の村人だった。自分自身が原因不明の病気にかかったり、家族が原因不明の病気にかかったりした経験を持っている人である。病気にかかっている時、看病看事することができる香頭のところに行き、「行好」（善い行いをしましょう）と勧められた。それから、廟に焼香に行くようになり、次第に廟の活動に熱中するようになった。こうして、彼らは村の香頭になり廟の事務を管理し、神仏の誕生日には他の村人を廟に呼び線香を供える。また、災厄の除去も祈願する。その他、靈山への巡礼も企画する。つまり、A タイプの香頭は、宗教活動の招集者であり、組織者であり、施設の管理者なのである。しかし、この香頭には靈力はないとされている。

もう一方、B タイプの香頭は、民間の巫者であり、地元の宗教職能者である。この香頭は、地元では「大仙」、「出馬仙」とも呼ばれる。また、B タイプの香頭は三つのカテゴリーに分けられ、看香することができる香頭になるプロセスは、武高庄村では成巫過程とも呼ばれている。(1) 自然召命型。このタイプの香頭は、重い病気で死に直面していた者が、他の香頭によって治癒されたのち、その香頭から「神仏に選ばれ、神仏のために働くことになる」と告げられるなどして香頭となる。(2) 世襲型。元々香頭を出す家の生まれで、そのため香頭となったタイプ。(3) 個人的探求型。師匠の香頭のもとで修行して、香頭となったタイプである。⁽⁸⁾ 習得巫ともいえる。このような B タイプの香頭は、自宅に「神卓」（神仏に捧げるテーブル）があり、毎朝、線香を焚いて神仏を拜む。また、神仏に線

香を捧げるだけでなく、線香の燃焼状態を観察、つまり、看香によって、依頼者の悩み（「病」や「事」）を解決することもできる。具体的な「病」や「事」については、看香の節で詳しく紹介する。Bタイプの香頭は、靈感の強い霊能者として、時に、医者であり、司祭であり、ソーシャルワーカーという側面を持つのである。

最後に、AタイプとBタイプの類似点と相違点について述べる。まず、類似点について、これには二つの点がある。一点目は、A・B両タイプとも神仏のために働いているという点である。ただ、この働き方は異なる。二点目は、焼香することに熱心なところである。

次に相違点としては、廟のある村には必ず、廟の事務を管理するAタイプの香頭がいる。しかし、全ての村にBタイプの香頭がいるわけではない。Bタイプの香頭はAタイプの香頭に比べれば、人数もはるかに少ない。武高庄村では、Bタイプの香頭だけが靈感があり、人々の生活の問題を解決し、Aタイプの香頭はBタイプの香頭に依頼者を紹介することがあるが、自らは靈感能力を持っていないとされている。どちらも廟の事務に関わっているが、Aタイプの香頭が管理している廟は、普段は村の小さな廟でありあまり人気がないのに対し、Bタイプの香頭が管理している廟は周辺の村の中でも大きな廟であり普段から人気がある。Bタイプの香頭が管理している廟で行事があると、Aタイプの香頭に連絡をして式場に人々を集めて来るように知らせる。Aタイプの香頭とBタイプの香頭は、どちらも行好するために人々を巡拝させるが、Bタイプの香頭の方が毎年巡拝させる回数が多い。Bタイプの香頭は影響力があるので、毎回より多くの人々を巡拝させることができる。なお、本稿では特に言及がない場合は、香頭はBタイプを指す。

IV 香頭の組織と儀式

調査地域には香頭の組織があるが、その範囲は村落を超えており、師匠と弟子の関係を中心に構築されている。宗教職能者である香頭の周囲には何人かの弟子が常にいる。彼らは、香頭の指導のもとで行好を行う。

(1) 師匠と弟子の関係

孔香頭は1969年に生まれ、20歳頃に結婚し、夫の張華（仮名）がいる。武高庄村に住み、3人の息子と8人の弟子がいる。孔香頭の長男と次男は結婚しているが、三男はまだ大学に通っている。孔香頭の息子たちは弟子ではない。

孔香頭によれば、次のようにして香頭になったという。夫である張華の祖母は香頭であった。しかし、彼女の義母の世代で香頭になった人はいない。霊的な力を持つ者が現れず、香頭を受け継ぐ資格がなかったからだという。孔によれば、香頭を受け継ぐことができるのは嫁である。嫁は夫一族の家族であるが、娘の場合は結婚すると、他家の家族になるという。

1996年、彼女の義母は腰痛になったが、病院では治すことができなかった。腰痛を治す霊的な香頭がいることを聞いた孔は、義母を連れて会いに行った。香頭は、「あなたの家では以前、神明のために働く香頭がいた」と言った。しかし、今はもう働く人はいない。義母の病気を治すには、神明を「復位」（元いた神仏を祀ること）して、もう一度供養しなければならない。つまり、「安卓」するこ

とである。

1996年に、孔は「安卓」をした。しかし、すぐに香頭になったわけではない。「安卓」をした後、孔は毎日、玉皇大帝と「神卓」に線香を供えた。そして、その線香の状態を観察するのであった。また、師匠の巡礼について行き、廟の行事の手伝いもした。さらに、夢の中で神仏の「点化」（啓示を受けて悟ること）を得た。

孔香頭は最初、自分が看病看事をできることを知らなかった。2013年頃、義姉（兄の嫁）の足の痛みが病院に行っても治らず、義姉は「あなたは長年「神卓」を拝み、10年以上も看香を習っている。なぜ足が痛いのか、看香でわかるようにして」と孔香頭に頼んだ。そこで孔香頭は線香を焚き、燃えた状態からメッセージを読み取った。それは、義姉がここ数年、神仏に線香をあげていないというものであった。孔香頭は「家に帰って神仏に供え物をし、ここ数年は息子の子供の世話をしている焼香する暇がなかったことを告げ、許しを請うべきだ」と義姉に告げた。義姉は孔香頭の言うとおりにした結果、足の痛みは治った。その後、親戚の間で孔香頭が看病看事をできるという噂が広まった。以上の経緯からすると、孔香頭は世襲型の香頭であるといえる。張家には以前から香頭がいて、それが代々受け継がれていくのである。

香頭の弟子になる人は、自分や家族が原因不明の病気にかかり、香頭の数回の治療で快癒するが、その後、再発してしまうケースがある。そういった場合、香頭は依頼者に「安卓」した方がよいと勧める。こうして病気は治るのである。筆者は香頭に、なぜ最初から「安卓」することを依頼者に助言しなかったのか、と尋ねた。香頭は、「請神容易、送神難」（神を招くのは簡単だが、神を送り出すのは難しい）と答えた。「安卓」とは、「安神卓」とも呼ばれる。「神卓」は神仏への供物を飾るテーブルであり、「神譜」または神仏像の前に置かれる。香炉や供物などを供養するための卓あるいは「卓子」である。「安卓」は、毎日線香を焚いて神仏を拝まなければならない。このように「安卓」を始め、線香を焚く人は行好ばかりしている人よりも、神仏に対する誠意が強く感じられる。つまり、「安卓」は行好より修行の高い段階に相当し、神仏により近づいている。「安卓」は弟子入りの儀式にもなっており、神仏が憑依するのであれば、香頭はその弟子に看香することを学ぶように勧める。このようことから、「安卓」は慎重に行われるべきなのである。

表1の孔香頭の8人の弟子のうち、2人が男性、6人が女性である。出身地は館陶県7人、大名県1人になっている。「安卓」・「扶卓」は全て2021年に行われた。孔香頭によると、徒弟の受け入れが正式に始まるのは2021年で、その年に行われる「安卓」・「扶卓」の儀式に全員が集中していたという。香頭に助けを求めた理由は、原因不明の体調不良者5人、息子の結婚など2人、夫婦仲で悩んでいる人は1人である。「神卓」はかつてあったが、あらたに「扶卓」をするのが5人、「安卓」をするのが3人となっている。

「安卓」は二種類あって、一つ目は、もともと家に「神卓」がなく、「安卓」によって本格的に神仏を信じるようになる場合。二つ目は、もともと家に「神卓」があったが、再び「安卓」しなければならない場合である。その理由は、きちんと拝んでいないために家族に何か悪いことが起き、依頼者はあらたな香頭に助けを求め、「安卓」をすることになる。再び「安卓」される神仏は、以前から祀られていた神仏とは異なる。新しい香頭の家神（「神譜」）の体系に従って、新しい「神卓」が捧げられるのである。表1の王はその例である。

表1 孔香頭の弟子たち

苗字	性別	年齢(2022年12月現在)	出身地	「安卓」・「扶卓」を行った年	香頭に助けを求めた理由	「安卓」または、「扶卓」
王	男	35	大名県	2021年2月	家庭内でいろいろなことがうまくいっていない。母親が原因不明の病気で苦しんでいる。	王の家には「神卓」があったが、拜んでも一家の安寧は守られず、近年は家族に事故が起きている。彼は孔香頭の弟子となり、「神譜」を供養した。この「神譜」に祀られている神仏は、孔香頭の提案に従った。実際、王が祀った主神と孔香頭が祀る主神は同じである。ただ、王が祀った配神が、孔香頭の助言に従って少し調整されただけである。
武 a	男	63	館陶県張高庄	2021年5月	自分自身が原因不明の病気を持っている。	家には「神卓」があったが、都会にいる娘の子供の面倒を見に行き、2年ほど神仏を拜むことがなかった。今回家族にトラブルがあったので、孔香頭に、「扶卓」をお願いした。
劉	女	54	館陶県衛東	2021年4月	劉の義母はプロテスタントである。毎日祈念し、孫に嫁が来るようにとも祈っている。しかし、息子は34年経っても嫁をもらうことはなかった。劉はプロテスタントではなく、息子が嫁をもらえないのは義母の祈りのせいだと考えている。彼女は、孔香頭の力で息子の名前をプロテスタントから解除し、嫁をもらうことができなかと、相談に行った。	「安卓」をする。
郭	女	44	館陶県張高庄	2021年9月	息子に原因不明の病気がある。	「神卓」はあったが、「扶卓」をする。
武 b	女	60	館陶県韓高庄	2021年6月	毎晩、悪夢にうなされ、日中も元気がない。	「神卓」はあったが、「扶卓」をする。
郝	女	65	館陶県前宁堡	2021年11月	20年前息子を治すために、「安卓」をし、神仏に供え物をするようになった。ここ数年は忙しさもあって、線香をあげる暇がなかった。2021年の初めには自分も歯が痛くなり、その後、半年間治療しても治らなかったため、香頭に相談に来た。	「神卓」はあったが、「扶卓」をする。
汪	女	34	館陶県韓高庄	2021年10月	夫婦関係が悪い。また養豚が家族の主な収入源となっているが、豚の不可解な死が続いている。	以前は「神卓」があったが、最近家の中で不可解なことが続くので、孔香頭に頼んで今まで供奉した「神譜」を廃棄し、孔香頭の家祀に祀られている神仏に従って再び「安卓」することにした。
馮	女	53	館陶県張高庄	2021年3月	実家は裕福で、息子の容姿も悪くないのに、嫁が来ない。そこで、香頭に相談に来た。	「神卓」はあったが、「扶卓」をする。

2022年3月、孔香頭へのインタビューをもとに筆者作成

王も孔香頭も、もともとは郝香頭（広平県張洞村に在住）の弟子であった。孔香頭が「安卓」したとき、儀式は郝香頭が司った。しかし、どんな神仏を祀るかは孔香頭が決めた。前述したように、孔香頭の義理の祖母は香頭であったが、孔が香頭になる以前、彼女の義母の世代で香頭になった人はいなかった。霊的な力を持つ者が現れず、香頭を受け継ぐ資格を失ったからだという。孔香頭の家には神仏（「神譜」）がいるが、祀られていなかっただけなので、郝香頭が祀る神仏（「神譜」）には従わなかったのである。その後、孔香頭は看病看事することができる香頭となった。王の「神卓」に祀られているワンセットの神仏は、郝香頭の「神卓」に祀られている神仏を踏襲している。しかし、王が拝むようになってから、家族に不可解な出来事が後を絶たなくなった。そこで、王は郝香頭との関係を断ち切り、孔香頭の弟子となっている。孔香頭は、自分の家で祀っている神仏の体系に合わせて、新しい「神卓」を供える儀式を行った。

「安卓」とは異なる「扶卓」と呼ばれる儀式もある。通常の場合では、「扶卓」は師匠である香頭に手伝いを依頼する。ただし、特別な理由がある場合は、新しい香頭が「扶卓」の主宰者として招待されるという。その理由は師匠である香頭との連絡が途切れ、または亡くなったなどである。「扶卓」は、それまで神仏に捧げられていた「神卓」を再活性化したものである。もともと信者の家に祀られていた神仏は常に家の利益を守ってきた。しかし、礼拝を行わないなどの怠慢により、家の中で物事がうまくいかなくなるようになる。「扶卓」とは、すでにあった「神卓」を補強する意味であり、「扶卓」するときは、本来の師匠に行ってもらおう。「扶卓」をした後も、信者（弟子）の家に悪いことが起こった場合、再び「安卓」をするために新しい香頭を求めることになる。あらたな香頭は、それまで信仰していた神仏を送り出し、新しい神仏を迎え、新香頭の家を構築するのである。

「安卓」することとは、師匠と弟子の関係をより密接にすることを表している。「安卓」した、弟子は毎日自宅で線香を焚き、電話などで師匠に連絡して、線香の状態を尋ねて、コミュニケーションを通じて神仏にまつわることを学ぶ。また、弟子自身に神仏が憑依するようになれば、看香の習得は非常に早くなる。さらに看病看事ができる香頭にもなりやすい。もちろん、香頭の弟子になったからといって、誰もが看病看事が可能な香頭になれるわけではない。ほとんどの弟子たちの「安卓」する目的は、やはり自分の家族の利益を守ることであり、より神仏に近づくために、行好の修行はさらに強化される。

（2） 儀式で師匠と弟子の関係を維持する

香頭と弟子の関係は、いろいろな形で保たれている。弟子は毎年旧暦の6月1日と12月1日に香頭の家に行って焼香をする。これは、相互の関係を確認するためである。香頭が「封印」（年末の神仏と香頭の休み）される12月28日と、香頭が「開印」（神仏と香頭の休憩終了）される正月8日には、再び香頭の家に行って線香を焚く。さらに、香頭が催す巡礼、廟会、「祭災」、「晒経」などにも参加する必要がある。香頭の家では、新しい神仏を祀るようになり、神仏の「開光」儀礼を行う。「開光」から3年間は、毎年「賀光」（開眼した神仏を祝福する）という儀式が3日間連続で行われる。この時、弟子は焼香に来る人たちの世話を手伝い、また、弟子たちは香頭の家で神仏や香頭自身の誕生日にも出席する。ここでは、「祭災」、「晒経」と「開光」について簡単に説明する。

「祭災」とは、香頭が行好する人々を集めて供養し、経を唱えて、神仏に災厄の除去を祈願するこ

とである。また、「晒経」は孔香頭の師匠（郝香頭）の修行法である。毎年旧暦の6月6日（晴れの日を選ぶので、6月6日の前に行くことが多い）に、郝香頭の弟子たちは郝香頭の管理する廟に行き、青色の服を着て経文を受け取り、大雄宝殿を三周して、空き地に置いて干す。続いて、「開光」とは、開眼儀礼のことで、新作の仏像・仏画を供養し、眼を点じて魂を迎え入れることである。

香頭が開催する宗教儀式には、弟子として参加し、その中でも特に重要なものは、香頭の誕生日と神仏の「開光」、「賀光」である。今回の調査時、筆者は香頭の誕生日に参加した。香頭の誕生日の儀式について、以下に挙げる。

(3) 香頭の誕生日

2021年12月26日、筆者と孔香頭は、孔香頭の師匠である郝香頭の85歳の誕生日に出席した。彼女は張洞村に住み、2人の息子と2人の娘がいる。息子も娘も結婚している。彼女の夫は10年前に亡くなったという。孔香頭の住む武高庄村と郝香頭の住む張洞村は4キロメートルほど離れている。

香頭の誕生日を祝うこととは、師弟関係を維持するためのものであると考えられる。まず神仏のために線香を焚き、その後、香頭の誕生日を祝うのである。

当日の朝8時頃、郝香頭は「神卓」を片付け、線香をあげて誕生日を迎えられたことを神仏に感謝する。10時頃、弟子たちは郝香頭の家に着いた。20人の弟子たちはまず神仏に線香をあげ、それから現金を渡す（写真3）。現金を渡した弟子は、郝香頭から「紅布」（赤い布）をもらう。郝香頭によると、「紅布」には霊力があり、これを身につけると幸運が訪れるという。「紅布」を受け取った弟子の中には、焼香に訪れた人たちの世話をする者もいれば、客人（郝香頭の親族や行好する人たち）の食事の準備を手伝いに行く者もいた。12時近くになると、弟子たちが祝いに持ってきたバースデーケーキを出す。そして、郝香頭は弟子たちに庭内に招かれて挨拶する。弟子たちは郝香頭の「国を愛すること」、「善を行うこと」と「親に孝行すること」の説教と挨拶を聞く（写真4）。具体的な内容は以下に記す。

皆、仏教を信仰し、道教を信仰しているが、それは全て行好の一部である。最も重要なのは、善行を行い、両親に孝順であること、法律を犯さないこと、他人を虐待しないことである。その後、神仏に線香を捧げることがある。もしもずっと他人を罵り、両親に孝順でなく、そしてしばしば盗みや悪事を働いたら、線香を焚いて仏に祈ることをやめるべきである。仮にあなたが再び線香を焚いて仏に祈っても、神仏はあなたのような人を祝福しないだろう。私たちが常に線香を焚いて神仏に祈る理由は、神仏の祝福を求めただけでなく、自分が悪いことをしたか、自分の良心に対して違反していないかを常に自己反省するためでもある。そして、行好の人々は規律を守り、中国共産党を尊重し、自国を愛することが特に大切である。

今日、こっちに来られた目的は、一つ目は敬神し、二番目は人々に敬意を払う。看病看事することができる香頭になれるのは誰か。誰が、看病看事することができる能力を持つことで有名になれるか。これは天意である。今日用意した料理は美味しくなかったし、天気もかなり寒かったので、皆さん、お疲れ様。来てくれた皆さんには感謝している。



写真3 線香を供える

(いずれも 2021 年 12 月 26 日筆者撮影)



写真4 挨拶をする



写真5 祝歌を歌う

郝香頭の挨拶が終わると、弟子たちは誕生日の『十輪蓮花』という歌を歌った。弟子たちが師匠である郝香頭への誕生日の歌を歌った後、供え物は「神卓」から下げられ、皆で食べる。歌詞は以下の通りである。

今日は師匠の長寿を寿ぐ。まず、師匠は有名になりますように。そして、神々に拝む。金運が良くなる。幸せになりますように。再び、師匠に長寿を祝する (写真5)。

前述の香頭の弟子への言葉の核心的な意味は、線香を焚いて神仏に敬意を表すことは重要であるが、心に善念を抱くことが根本にあるというものである。この善念は、地元の人々にとって非常に重要な概念であり、行好と呼ばれている。言葉通りに解釈すると、行好は徳を積み善行を行うことを指す。地元の人々の日常生活での実践では、善行を行うことが行好である。また、日常生活での線香を焚いて神仏を祀る宗教的な実践も行好である。つまり、行好は地元の人々の観念において、単なる道徳的な実践だけでなく、宗教的な実践でもあるとされている。同時に、この観念は香頭が弟子に対して重要視している教育の一環でもある。

V 看香 (巫業)

香頭は個人的に神仏に線香を捧げるだけでなく、他の人のために看香を行う。ここでは、看香とは何かについて述べ、孔香頭の看香の儀式について言及していく。

(1) 看香とは

華北地域の民俗宗教における線香には、様々な役割がある。劉枝萬によると「中国の民間信仰では、線香を通じて神と交信すること、鬼を追い出すこと、悪霊を避けること、悪霊を追い払うこと、疫病を追い出すこと、魂を戻すこと、汚物を浄化すること、健康を保ち続けることなど多くの機能がある」という (劉 1967 : 129)。また、李亦園も「線香を通じて神と交信すること」と同じ視点を持

っている（李 1983：17）。これらに基づき、人類学者である張珣は線香の役割について次のような見解を示した。

線香は神と交信できるとともに、食べ物と同じように神に喜ばれる役目も持っている。さらに、線香にはもうひとつの役割があり、それは線香を使って占うことである（張 2006：40）。

調査対象である華北地域の人々は、線香を神仏の食べ物だと考え、また供え物として、先祖や神仏を祀るために使う。線香を焚いたときの煙は、祖先や神仏に通じ、参りに来たことを伝える。線香は神仏と交信することができ、占いに使うことができると信じられているのである。

香頭は看香の儀式を通して、依頼者の二種類の悩みを解決することができる。一つは依頼者の「虚病」である。「虚病」は「実病」の反意語であり、主に原因が特定できず、病院に行っても治らない病気のことである。香頭から見れば、憂鬱、狂気、精神異常、無気力、子供の怯え、夜泣きなどは「虚病」である。もう一つは依頼者の悩み事（夫婦喧嘩、交通事故、嫁入り、子授け、進路、学業、事業、財産、投資など）である。香頭は、この二種類をそれぞれ「看病」と「看事」と呼んでいる。

2021年11月30日、筆者は孔香頭にインタビューを行った。インタビューの内容は、線香の燃焼状態についてで、この内容は、孔香頭の説明をもとに筆者がまとめたものである。彼女の説明は、『四大門』という本の中に記される線香の燃焼状態の記述と似ている。例えば、線香がとても赤く、明るく燃えている状態は、非常に良い状態である（李 2011：71）。しかし、孔香頭の線香の燃焼状態の説明と、『四大門』に記されている線香の燃焼状態に関する記述には、いくつかの相違点がある。その詳細を以下に示す。

(2) 「看病」と「看事」

一把の線香の真ん中が黒いのは、体の炎症である「実病」を意味する。黒くない場合は「虚病」を意味する。香炉の灰が「神譜」の方向に曲がっているのは、神仏がこの問題に対処したことを証明している。そうでなければ、神仏はこの問題に対処していない。

「虚病」に悩まされる理由は二つあるといわれる。一つは、患者は通常自宅で神仏を供養しているものの、初詣、十五夜、正月に供養していない場合である。このとき、香頭は患者に行好しなさいとアドバイスする。つまり、初詣、十五夜、正月に神仏に供物を供えるのである。さらに、病状が重い場合は、河北省邯鄲市にある周辺の霊山、「四山」に行き神仏を祀るようにと進言する。四山とは、邯鄲市大名県金灘鎮にある石家寨、邯鄲市大名県にある儒家寨、邯鄲市永年区にある聡明山、邯鄲市広平県にある王九郎寨である。もう一つ、患者が陰気（「孤魂野鬼」、精霊、仙家など）を引き寄せている場合である。この事例では、患者は香頭の家で神仏に供物を供え、大量の紙銭を燃やし、神仏に陰気を払ってもらう。

一把の線香の中が暗い場合は、神仏への願い事がうまくいかないということを意味する。あるいは、依頼者の心が不安定であることの表れである。線香の高さが不揃いなのは、依頼者が適時に供物を捧げなかったため、神仏が怒っていることを意味する。線香が真っ赤に光って燃えているのは「透」といい、とても良い状態を指す。これに対して、暗く燃えて光がないのは「不透」と呼ばれ、

物事が悪くなることを示す。香炉の灰が「神譜」の方向に曲がっているのは、神仏がこの問題に対処していることを意味する。そうでなければ、神仏はこの問題に対処していない。線香と線香の隙間に香の灰があるのは、誰かがその事柄を妨害していることを示している。

香頭は看香を通して依頼者の「病」や「悩み事」を解決する。このような活動を「看病」、「看事」というが、実際には「看病」と「看事」の区別はそれほど明確ではない。以下で、看香の儀式過程を説明する。

(3) 孔香頭の看香の儀式過程

2021年12月15日、孔香頭の家で調査していた時に、筆者は秦花（仮名）に出会った。彼女は武高庄村の村民で、33歳（2021年当時）であった。23歳くらいのときに武建民（仮名）と結婚した。秦花には10歳の娘がいるが、男児を出産することができなかった。この時は神仏に男児を授けてもらうため、孔香頭に頼みに来た。

秦花は「半月前から熱と頭痛があって、薬を飲んでしたが、病状は再発を繰り返している」と孔香



写真6 線香の燃焼状態
(2021年12月15日筆者撮影)

頭に言った。秦花の話聞いた孔香頭は線香を焚き、「秦花の熱と頭痛が良くなったり悪くなったりを繰り返している」ことを神仏に報告し、教えを請う。孔香頭は、火をつけた線香を手にしながらか、「秦花の頭痛が「実病」なのか「虚病」なのかを薬王爺に診断してもらい、秦花の病気が「虚病」であったら、線香を通して「点功」していただくよう依頼する」と薬王爺に報告した。「点功」とは、薬王爺の診断結果が線香に反映されることである。孔香頭の家「神卓」には、「神譜」が祀られており、この中に、薬王爺の神像がある。孔香頭は、香炉に線香を挿し状態を観察した。線香は黒くなく、秦花は「虚病」であることが神託されたのである（写真6）。

孔香頭は、「大丈夫だ、薬を飲めば大丈夫だ」と言った。孔香頭は秦花の病気のために薬王爺に薬を求めた。「神譜」の前に置かれ



写真7 薬をもらう
(いずれも2021年12月15日筆者撮影)



写真8 薬を飲む



写真9 秦花の頭を揉む

た水が半分ほど入っている碗を持ち、「薬王爺に頼んで秦花に「薬」を与え、人と神が協力して病気を治すように」と唱えたのである。祈願した後、孔香頭は水の入った碗を持ち、燃えている線香の上で左右に三回ずつ円を描いた（写真7）。これは病気を治すために線香から霊気をもらうのだという。筆者にはこの「薬」は水にしか見えなかった。秦花は孔香頭から碗を受け取り、「薬」を飲んだ（写真8）。最後に孔香頭は3分ほど秦花の頭を揉み（写真9）、これで頭痛が和らぐと言った。

儀式が終わってから、孔香頭は秦花の義母と話をし始めた。義母は、もう一つ、孔香頭の力を借りたいことがあると言った。息子と嫁は結婚して10年になるが、子供は女の子が1人しかいなかった。2人は病院で検査を受け、健康状態には何の問題もなかったが、なかなか子供を授かることができなかった。それを聞いた孔香頭は線香を焚き、男児を欲しがっているが、妊娠できていないことを神仏に報告した。火をつけた線香を手にしなから、孔香頭は「送子奶々よ、秦花に男の子を授かることができれば、線香はきれいに燃えますよ。もし、送子奶々が秦花に男の子を与えることができなければ、線香を通して、送子奶々に「点功」してもらおう」と送子奶々をお願いした。「点功」とは、送子奶々の診断結果が線香に反映されることだと言った。孔香頭の家「神卓」には、「神譜」が祀られている。この「神譜」の中には、送子奶々の神像がある。孔香頭が香炉に線香を挿したところ、2本の線香の間に落ちた灰があった（写真10）。孔香頭は、「2本の線香の間に落ちた灰があり、子を宿せなかったのは墓場のせいである」と秦花に言った。

孔香頭は、墓地の何が悪いのかを確かめるために、再び線香を焚き始めた。火をつけた線香を手にしなから、「地皇老祖よ、武建民（秦花の夫）の墓地のどこが悪いか診断してもらおうよう依頼する。得られた結果は、線香を通して地皇老祖に「点功」してもらおう」と地皇老祖をお願いした。「点功」とは、地皇老祖の診断結果が線香に反映されることだという。孔香頭の家「神卓」には、「神譜」が祀られており、この中に、地皇老祖の神像がある。孔香頭は香炉に線香を挿すと、今度は線香と線香の間に隙間ができた（写真11）。この隙間の方向は、東南に向かっており、これは墓地の東南方向に「漏気」があると、孔香頭は説明した。「漏気」とは、生気が漏れ出ていることであり、風水的には、墓場の運気が逃げてしまったことである。孔香頭が示した解決策は、墓地の東南に「紅布」を敷いて、墓地からの生気の漏れを遮断することであった。その後、この「紅布」を呪文とともに燃やす。「紅布」は長さ1.5メー

トル、幅1メートルである。この「紅布」とは、ただの布ではなく、神仏から霊気を受けた布である。

最後に再び線香を焚くと、今度は良い状態になった。秦花はひざまずいて神仏に感謝し、この儀式は完了した。孔香頭は秦花に、もし嫁が男児を懐妊したら、神仏に礼を言いに来ようように、そのときは



写真10 線香と線香の間に落ちた灰
(2021年12月15日筆者撮影)



写真11 線香と線香の間に隙間
(2021年12月15日筆者撮影)

「金元宝」(10袋)、「錦旗」、豚頭を持参し供養するようにと告げた。「金元宝」は金色の硬い紙で作られた紙銭である。「錦旗」とは赤い布でできた旗で、ほとんどが長方形か二等辺三角形をしており、香頭や神仏に贈ることで、敬意や感謝を表すために使われるという。

以上は、孔香頭が行った看香の儀礼である。依頼者である秦花は、発熱と頭痛があり、病院に行って半月間薬を飲んでも症状が回復しないため、孔香頭に助けを求めてきた。孔香頭が看香により神仏から得たメッセージは、秦花が「虚病」であるということであった。治療法は秦花に霊気を受けた水を飲ませることである。秦花はこの「薬」を飲んだが、目立った変化はなかった。この「虚病」の治療のケースはここで終了とした。だが、彼女は熱と頭痛を診てもらっただけでなく、神仏に子宝を授かるようお願いもした。孔香頭が神仏から看香で得たメッセージは、彼女の家の墓地(この場合は夫の実家の墓地)が東南の方角に「漏気」があるため、結婚して10年経っても娘が1人しかおらず、息子に恵まれないということであった。彼女の家の墓地は生気を失っているのである。孔香頭の解決策は、「紅布」を使って墓地の気の漏れを遮断することであった。こうすることで、墓地の活力を取り戻すようにしたのである。

この事例では「病」と「事」が絡み合っている。解決策は、水と「紅布」でそれぞれ神聖な儀式を経て神力を与えることである。香頭のやり方は、依頼者に「病気になるって薬を飲む」、「羊が逃げてから檻を修繕する」といった論理を模倣することに相当する。人々の俗世の思考方式は、その構築された神聖な世界の宇宙観にも反映されていると考えられる。

また、孔香頭の家には祀られている神仏は非常に混在しており、多くの神仏がいるが、三つの層に分けることができ、最上層には玉皇大帝、大日如来などが主神として祀られている。中間層には無生老母、泰山奶々(碧霞元君)、観音菩薩、孔聖人、送子奶々、薬王爺などが主神として祀られている。下層には閻王、地宮老母、地藏王菩薩、地皇老祖などが主神として祀られている。この三階建てのシステムは、ある意味では、天界、人間界と地下界の縦構造の宇宙観を呈しているのみならず、神仏の世界における等級性、すなわち神仏たちのランキングが反映されており、さらに、その中から「三教合一」(儒教、道教、仏教)の形態と見ることができる。

おわりに

武高庄村では、香頭は呪術の実践者でもある。香頭は、看香することで神仏からのメッセージを受け取り、そのメッセージを依頼者に伝える。香頭が依頼者の問題を解決する手段の一つは、依頼者に対して常に「行好」(ここでは、神仏を信じるように)するよう助言することである。

香頭は、他の宣教師と同じように熱心に宣教した。人々に行好と言うことは、徳を積んで善を行うことである。行好をすれば「虚病」が治り、来世のために徳を積むことができる。香頭が人々に勧めた行好とは、山へ巡礼に行くこと、廟で線香を供えて神仏を祀ること、自分の家で「安坐」し、そこで、神仏を祀り、毎日線香を焚いて神仏を拝むことである。香頭が人々に行好を勧めるのは、宗教的な意味合いが強いのである。香頭は看香することで、患者が「実病」か「虚病」か、を判断する。「虚病」にかかる患者の治療を引き受けるが、「実病」にかかる患者の治療を引き受けず、逆に病院に行って医者の治療を受けるように勧める。しかし、香頭は「実病」と「虚病」の合併症にかかる患者

の治療を引き受ける。香頭は、「本人と神仏が協力して治療するように」と言う。つまり、患者が病院に行って治療を受けると同時に、香頭も神仏の力を使って治療するのである。神仏に憑依され、看香をする香頭もいれば、焼香の状態だけで判断する香頭もいる。いずれにせよ、香頭は神仏からのメッセージを受け、神仏のメッセージを依頼者に説明するのである。香頭は、神仏の力によって人々の問題を解決することを自らの仕事とし、また、それを行好と解釈している。

靈感のある香頭は組織化されており、その形態は師弟関係となっている。師匠である香頭は弟子の「安阜」の儀式を司ることで師弟関係を確認する。「安阜」とは、弟子が神仏を崇拜し、神仏に近づくことを意味する。また、さらなる修行、行好を行う。「安阜」した後、弟子たちは毎朝神仏に線香を捧げて燃焼状態を観察し、わからないことは師匠にアドバイスを求めることで、師匠と弟子の距離は近づく。同時に弟子は師匠が行う「封印」、「開印」、「開光」、「賀光」などの儀式に参加しなければならない。本稿では、事例として師匠である香頭の誕生日への参加を扱っている。このような香頭が開催する宗教儀式に参列する一般的な流れは、信者は持参した供物を神仏の前に供え、焼香し、頓首し（叩頭）、善行を積みという師匠である香頭の説教を聞き、共に食事をする。前述したように、香頭は弟子たちに説教し、第一に日常生活での善行と親孝行を説き、第二に神仏への供養を説いた。ここでの香頭の弟子たちへの教えは、まさに華北地域における善行実践の姿である。

靈感のある香頭の宗教的実践の主な形は、看香儀式を通じて、人々が生活の中で遭遇する「虚病」や悩み事を解決するのを助けることである。このような人々の「虚病」や悩み事を解決する方法は、現代の科学的なシステムとは完全に一致するものではないが、人々は時に、信じられないようなことや「虚病」を解決するために、香頭に頼らざるを得ないことがある。香頭が行う看香儀式は、まだ、地元ではあまり公になっていない。焼香で最も批判されているのはこの部分だろう。一般的には「迷信」として非難されることもあり、霊媒である香頭を含む要素も関連している。日常生活の実践宗教の合理性を追求する必要があり、その合理性は公共社会のオモテ文化となることを目指している。それは検閲されるということであり、検閲される部分が香頭の看香活動をしている部分だとすると、この部分は本当に消されてしまうのだろうか。筆者は、これまでの歴史から現象が消えることはなく、やはり、政策の緩和があれば再び現れ、政策の厳格化があれば水面下で活動が続く可能性があると考えている。それなら、国家が行好を民俗宗教活動として認めれば、人々は堂々と活動を行うことができるし、逆に迷信活動とすれば厄介な立場に立たされることになる。筆者は、それらは全て本当に庶民の日常的な宗教活動であり、同じ正当性を持っているはずと考えている。

註

- (1) 渡邊欣雄は1978年に台湾の儀礼を調査し、1991年に『漢民族の宗教——社会人類学的研究』を出版した。この本の中で渡邊は「漢民族の宗教の基礎およびその中核は、いかなる宗閥にも属さぬ「民俗宗教」である。漢民族全てに共通する宗教こそ、唯一、民俗宗教である。したがって道教でもなければ仏教でも儒教でもない」（渡邊1991：3）と指摘した。
- (2) 調査地における行好にも二つの意味があり、一つは広い意味での行好である。それは善行を行うことに相当し、他者や社会に対する友情と慈愛を示す崇高な人間的精神である。老人を敬い、子供を愛し、親に孝行することなどである。もう一つは狭い意味での行好である。それは、神仏を祀り、焼香すること、つまり、民俗宗教的活動に関連するものである。

- (3) 1 畝=666.67 平方メートル。
- (4) 1 元=20 円 2023 年 5 月に、Alipay の為替レートから換算したもの。
- (5) 邯鄲市の新型化工産業園区は、塩化工業や精密化工業などの新型化工業移転を受け入れることを開発の重点としており、邯鄲市の 12 の戦略的支援プロジェクト、邯鄲市の産業構造調整のトップ 10 プロジェクト、邯鄲市の 50 の主要な重点課題プロジェクトに該当する。
- (6) http://wap.tcmmap.com.cn/hebei/guantaoxian_shoushansixiang_wugaozhuangcun.html これは武高庄村に関する概要のウェブページで、主に武高庄村の人口、耕地、収入、村の施設、生業に関する情報を参考にしている。最終閲覧日は 2023 年 11 月 24 日である。
- (7) 四大門はキツネ、イタチ、ハリネズミ、長虫（ヘビ）の四種の動物の総称である。四大家ともいう。これは北平（北京）近郊の重要な信仰である。ただの動物崇拜ではなく、神聖なキツネ、イタチ、ハリネズミ、長虫を崇拝し、胡門（キツネ）、黄門（イタチ）、白門（ハリネズミ）、柳門あるいは常門（長虫）を四大門とも称する。これらを総称して「胡黄白柳」という。
- (8) 師匠から看香すること、経を唱えること、「下神」（神に憑依する）ことなどを学び、次第に看病看事を行う香頭になっていく。

参考文献

日本語（五十音順）

- 中国農村慣行調査刊行会編 1952 『中国農村慣行調査 第一巻』 岩波書店
 中国農村慣行調査刊行会編 1958 『中国農村慣行調査 第六巻』 岩波書店
 渡邊欣雄 1991 『漢民族の宗教——社会人類学的研究』 第一書房

中国語（アルファベット順）

- 渡邊欣雄 1998 『漢民族的民俗宗教——社会人類学的研究』 周星訳、天津人民出版社
 顧頡剛 1988 『妙峰山』 上海文芸出版社
 李慰祖 2011 『四大門（補訂版）』 北京大学出版社
 李亦園 1983 「訪李亦園教授從比較宗教学觀點談朝聖進香」『民俗曲芸』(25)：1-22
 劉枝萬 1967 『台北市松山祈安建醮祭典』 中央研究院民族学研究所
 岳永逸 2010 『靈驗・磕頭・伝説——民衆信仰的陰面与陽面』 三聯書店
 岳永逸 2014 『行好——郷土的邏輯与廟会』 浙江大学出版社
 岳永逸 2017 「妙峰山的光——行香歩会：北京香会的譜系与生態」『民族芸術』(1)：163-168
 周星 2011 「民俗宗教与国家的宗教政策」周星編『国家与民俗』pp. 355-367、中国社会科学出版社
 張珣 2006 「香之為物——進香儀式中香火觀念的物質基礎」『臺灣人類学刊』4 (2)：37-73